

「今、求められる宣教とは？」

同志社大学社会学部准教授

マーサ・メンセンディーク

イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病氣や患いをいやされた。そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病氣や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った。
(マタイによる福音書 4 章 23-25 節)

こんばんは。

同志社大学 150 周年という記念すべき節目の年の創立記念礼拝でメッセージをさせていただくことは私にとって大変光栄なことでもあり、この機会をいただき感謝しております。

ここに集うみなさまにとって、この礼拝が良い時間となりますように。そう願っております。

本日は「宣教」について少しお話をしたいと思います。新島襄が同志社英学校を創立される初期の頃からラーネッドやデイビスといった宣教師の協力もあったことは同志社の歴史を学ばれたならご存じかと思います。また同志社の歴史には、「アメリカン・ボード」という名称も登場するので聞いたことがあるかもしれません。正式名称は American Board of Commissioners for Foreign Missions, といって、日本語では米国外伝導委員会になります。同志社の創立に関わり、のちに同志社に派遣された宣教師はこのアメリカンボード所属の方々です。また、新島もアメリカの教会から宣教師と同じ資格を得て帰国されたので、同志社の初代宣教師ということになります。実は私自身も宣教師で、現在はアメリカンボードの名称が変更され、アメリカ合同教会（英語では United Church of Christ, (略して UCC, コーヒー会社ではないです!) UCC の宣教師部、(Global Ministries) となりました。同志社創立の時代もそうでしたが、その後も日本への宣教師は数多く派遣されました。せっかくなので、この場をお借りして、同志社の宣教師の方々、特に戦後の時代になりますが、お名前をあげたいと思います。苗字だけになりますが、デントン、ヒバード、クラップ、グイン、デッソー、ヤング、サーバー、ダウブ、ウッド、ロイド、コーラー、グラント、ケリー、ラッシー、タッカー、ウィリアムズ、ルザレス、深田…この機会に先達の方々の貢献に感謝の意味であげさせていただきます。

さて、みなさんは「宣教師」と聞くとどういうイメージを持たれますか？

主にキリスト教の福音を伝え広めるための活動、つまり布教をする聖職者というイメージが多いと思いますが、聖職者に限りません。また、布教と並行して医療や教育といった活動をする、というイメージもあるかもしれません。私が所属している UCC にとっての「宣教」とは、キリスト教の信者を積

極的に増やすことに焦点を当てる布教活動が主な目的ではなく、世界の教会活動をサポートするというパートナーシップに基づきます。私ごとで恐縮ですが、私の宣教師活動はキリスト教の理念に基づく同志社大学の教員という仕事と併せて日本の教会が行う社会課題への取り組みに協力するという役割を兼ねています。

現在 UCC の宣教活動は世界各地の教育や医療、人権擁護活動や平和構築に携わる教会の働きをサポートしています。

日本での働きとしては、キリスト教系ミッションスクールへの教員の派遣は徐々に少なくなっていますが最近では短期間の派遣を中心にしています。UCC は栃木県にあるアジア学院に長年関わっています。アジア学院は有機農業と共同生活を通して持続可能で平和な世界を目指し、世界中の農村指導者の育成を行なっています。また、UCC は東日本大震災と原発事故後は福島県会津若松の放射能情報センターのサポートも積極的行なっています。

そして、ここ京都では、私が関わっている一つの活動の場所、「バザールカフェ」というところがあります。皆さんの中にはご存知の方も多いかもしれませんが、バザールカフェがどのような場所なのかと説明いたします。

バザールカフェは日本基督教団京都教区とアメリカ合同教会のパートナーシップに基づく一つのプロジェクトです。烏丸今出川の交差点からすぐ近くにある、元々はアメリカの宣教師館の一階を使って 27 年前に始まりました。ヴォーリス建築の古い木造の建物と広いお庭は独特な、そして落ち着く雰囲気、一般のお客様にも人気なカフェです。毎日の日替わりランチはフィリピン、タイ、ベトナム人のシェフを中心にエスニック料理を提供しています。ただバザールカフェはカフェ営利が目的ではなく、何らかの生きづらさを抱えている人を支え、居場所の提供という目的のもと運営しています。例えば、さきほど申し上げたシェフたちは、それぞれ日本社会で不安定な生活の中、理解のある職場で働ける、そういった支援をしています。また、薬物やアルコール依存症の回復プログラムのメンバーや、精神的に疲れている人、ひきこもりから一歩踏みだそうとしている人などはボランティア、あるいはスタッフとして働いています。バザールカフェは元々、HIV 陽性者や多様な性的アイデンティティをもつ人の居場所を提供するということから始まりました。当時、牧師で、関西学院大学で教鞭を取っていた榎本てる子さんが AIDS という病気を抱えている人たちの牧会カウンセラーの経験から、社会で差別を受けている人がありのままに受け入れられる場を作りたいというビジョンを持って始まったのがバザールカフェです。多様な性、文化背景、病気や障がいのある人たちが何かの属性だからではなく、1 人の個人として迎えられ、自分の属性を説明しなくてもいい、でも、話したかったら話す相手がいる、バザールカフェはそんな場所となっています。

また、学生も大勢関わっています。社会福祉の実習生、神学部の学生も多いです。学生たちは普段の生活では出会えない多様な人たちとの出会いや協働を通して貴重な学びをしていると実感しています。

ある神学生はバザールカフェについて、ニュースレターでこのように表現していました。「バザール

とは福祉事業である。学びの場である。教会である。出会いの場である。雇用創出の場である。学生の溜まり場である。私にとってバザールとは固定観念の解放の場である。」

バザールカフェは、いわゆる普通の「教会」ではないですが、教会の一つの活動です。スタッフのほとんどはノンクリチャンですが、キリスト教の教会を超えた多様な共同体とも言えます。国籍、人種、性別、年齢、障害や病気をもった人、いわゆる社会的マイノリティ、宗教も。様々な違いを持った人たちが集い、その人がその人らしくいることが出来る場を提供しています。また、多様な背景をもった人たちが共に出会い、人の痛みを知り、助けあい、暮らしやすい社会をみんなで創るためにいろいろな活動をしています。

様々な背景の方を歓迎するのが神様が求める教会の姿、キリスト教のコミュニティではないでしょうか。このような共同体が増えていけばなんて素晴らしい社会になるのか、夢が膨らみます。一人一人がその人らしく認められて、助け合う社会こそ、神様に祝福される平和な社会なのではないでしょうか？

バザールカフェの暖炉の上にひとつのポスターが飾ってあります。アメリカの合同教会がバザールカフェの20周年の記念に贈呈したものです。ポスターのレインボーカラーの背景は多様性のシンボルになっていますが、教会であることがどういうことなのかを、英語で記されていますので、紹介します。

Be the Church (教会であること)

Protect the Environment (環境を保護する)

Care for the Poor (貧しい人をケアする)

Forgive Often (よく許すこと)

Reject Racism (人種差別を排除する)

Fight for the Powerless (非力の人のために戦う)

Share earthly and spiritual resources (地上の資源とスピリチュアルな資源を共有する)

Embrace diversity (多様性を受け入れる)

Love God (神を愛す)

Enjoy this life (この人生を楽しむ)

このポスターが意味するのは、今紹介したようなことを大切にする共同体こそが教会なのだというメッセージです。バザールカフェは教会ではないけれど、このポスターが示す理念と重なるところが多いです。私はこの言葉とビジョンに共感し、このような教会に希望と喜びを感じるのです。

教会はキリストの平和に基づく共同体として成長し、平和な社会の実現に向かっていく。このことを信じるものとあります。

さて、本日選んだ聖書の箇所はイエスキリストの「宣教活動」を描いています。もう一度お読みし

たいと思います。

「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を述べ伝え、また民衆のありとあらゆる病気や患いを癒やされた。そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々を癒された。こうしてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った」

私はこのイエスの「宣教」の描写に大変惹かれます。福音を述べ伝えながら、目の前に苦しんでおられる人と接して癒されました。また、各地に、遠くまで足を運んで活動をされました。当時の社会規範では接してはいけないとされていた人、差別の対象となっていた人も、排除されていた人ともイエスは接したと聖書に記されています。

イエスが生きた時代もそうでしたが、今私たちが生きる現在も生きづらさを抱えている方々がいます。そういった方に、分け隔てなく接すること、そういう実践を通して神の愛を表すことこそが宣教なのではないでしょうか？

そういった意味で、宣教というのは、国境を渡って行うことだけではなく、国内でも行う活動だと思っています。宣教は、英語では mission といいますが、国内の教会が行う奉仕もミッションです。

今、世界を見渡すと、多くの国で国家第一主義、排外主義といった思想や方針が目立ちます。今、教会や NGO／NPO の協力関係、国際的にも国内でも人と人のつながりがますます重要になっています。現在もウクライナ、そしてイスラエルとの停戦後もパレスチナで人の命、特にガザ地区では多くの子どもたちが犠牲になり悲しいニュースで心が痛みます。そういう中で希望を失わず、平和を創っていく活動をコツコツと続ける必要をより痛感しています。

イエスキリストの実践に習い、苦しんでいる人に向き合い、人の尊厳と命を守るような実践を通して、より良い世界を創っていくための協力が求められていると思います。

ひとことお祈りいたします。

神様、今日、同志社礼拝堂でのひとときを与えられたことを感謝します。

どうか、私たちがこの礼拝を通して強められ、迎える一週間を元気に過ごすことができますように、お祈りいたします。

今、寂しい思いをしている人、病気で苦しんでいる人、様々な困難を抱えている人の側にいてください。私たちも人の痛みに寄り添うことができますように、私たちを導いてください。この小さなお祈りを主のみ名を通してみ前にお捧げします。アーメン